

# 笑顔のために

草の根技術協力

「ベトナムでの足こぎ車いすを利用したり  
ハビリモデル開発及び、リハビリ人材育成  
プロジェクト」



すいーっと病院内を走り抜けていく赤色と黄色の車いす。病院の服を着た患者さんらしき人がペダルを漕いでいるようだけど、こんな病院の中で何をしているのだろうか？

3年前に製品が試験導入された段階では、廊下で順番待ちをしている患者さんや家族には不思議に映ったと思います。この車いすは、足こぎ車いす Profhand (愛称 COGY)。ハノイのバックマイ病院リハビリテーションセンターで運用されているリハビリ機器です。

バックマイ病院を含めたベトナムの主要病院では、患者数の増加にベッド数、スタッフ数が追いつかないため、1ヶ月以内の入院で家に帰宅せざるを得ない方が多く、日本などに比べて十分かつ質の良いリハビリの時間をとることができていません。そこで、低負荷駆動、高い走行安定性、能動的な運動が可能な足こぎ車いすは、患者さんの短いリハビリ期間をサポートするように利用されています。例えば、麻痺の残る患者さんにとって、歩行を伴う運動療法は心身共に疲労が大きく、継続が困難なことも多々ありますが、座ったままリハビリが可能な足こぎ車いす療法では、介助者なしでは起立、歩行が難しい麻痺の強い状態の患者さんでも20分～30分の比較的長い運動が可能であるほか、脳梗塞発症後2週間程度や脊髄損傷の早期の段階の患者さんにも利用されていることです。このような世界でも先進的な早期リハビリ法は、日本でも実施例が少なく、足こぎ車いすの活用を我々

も注目しています。

足こぎ車いすを使用したベトナムのリハビリ技術向上の活動が始まったのは、2012年度のJICA協力準備調査(BOPビジネス連携促進)にさかのぼります。当初我々は、製品活用に共感を持って一緒に技術開発ができるベトナム側のカウンターパートを探して、行政機関、障害者支援団体・施設、病院などをまわり、日本の研究成果・製品効果を紹介していましたが、多くの病院、障害者施設の反応は「どんな支援をしてくれるのか」という一方通行なもので、こちらの思いとのずれに先行きの不安を感じていました。そのような状況下で、このバックマイ病院の Khanh リハビリセンター長は異なり、「患者に乗せてみたいから是非試させてくれ」とその場で試乗会がはじまりました。患者さんが顔を上げてにっこりしながら足こぎ車いすを操作する姿を見たとき、ようやく道が開けた思いがしました。

2014年度からは、JICA 草の根技術協力事業を実施し、日本側とバックマイ病院リハビリセンターで4つの目標を共有し、様々な試みを行いました。①ベトナムでの足こぎ車いすリハビリ効果確認、②運用方法(足こぎ車いす療法)考案と医療保険制度適用へ向けた準備、③足こぎ車いす療法を技術継承する人材の育成、④製品の保守と入手容易性確保です。約3年間の活動で、50人以上の患者さんの協力を得て製品のリハビリ効果が実証され、足こぎ車いすを使った運動療法は保健省の審査を通り、医療保険

適用となるための第一歩を踏み出すことができました。また病院内での長期利用により運用方法の確立とそれに携わる医師・理学療法士の数も増え、そのスタッフの技術指導のもと、バックマイ病院以外の地方病院(ハイフォン市1病院、ハティン省1病院、ダナン市2病院、ホーチミン市2病院)に足こぎ車いすが普及し、利用されるようになりました。これら活動の成果は、バックマイ病院側スタッフが自発的に保健省やリハビリ関連団体への働きかけ、地方病院の医師・理学療法士への指導、患者さんへの配慮などによるところが大きいと感じております。

最後に、足こぎ車いすを利用された方から感想アンケートに協力いただいているのですが、製品の使い勝手を自由に記入いただく欄に「好き」「楽しい」、とうれしいご意見が書かれていることもあれば、製品価格の妥当性に意見が及ぶこともあり、「どうやって値段を知ったのか」という疑問とともに、製品に興味を持って購入を検討されている証拠、と前向きに受け止め、今後より一層、患者さんたちの期待に応えられるような取り組みができたかと考えています。

●プロフィール 三浦尚人(みうら・なおと)

宮城県生まれ。東北大学大学院博士課程の時に足こぎ車いすと出会い2012年に(株)TESS入社。研究開発の一環として国際協力活動に参加。2017年からはタイでの足こぎ車いす普及をめざし活動予定。本事業は仙台大学、(株)re:terra、日本デビア(株)、Shonan Vietnamとの共同プロジェクト。

